

「思考の場」づくりで「活用型」読解力を育てる 〜一年「いろいろなふね」「はたらくじどう車」の実践から〜

山口県下関市立滝部小学校 香月 正登

一 「活用型」読解力を育てる

これまでの国語科における読解指導は、やはり文章の理解や確認に終始してきた感は否めない。また、「理解→表現」という関連指導の発想がなかったわけではないが、矢印が意味する「思考」への着眼が弱く、活動そのものへ目が奪われてきたことも読解力低下の一因だろう。

これから求められる「活用型」の読解力は、理解・確認を越えて、思考・表現を含む読解力として考えていかなければならない。批判的に読み、自分の考えを記述できる力、まさに、「思考し、表現する力」である。

二 教材化の工夫で「思考の場」づくり

例えば、説明文で、問いの文を空白にしてみる。子どもたちは、何が書かれているかを今まで以上に意識的に読むだろう。そして、答えの文を見つけ出し、それに合う問いの文

をつくる。物語で、異なったラストシーンを示してみる。それによって、どのような文脈の違いが生まれ、どちらが物語としておもしろいかを話し合う。そういう文学性にもふれることができる。

「思考の場」づくりとは、教材のもつ本質的な問いを浮上させ、相互の読みを高める教材への仕掛けである。あるものをなにと見たり、順序を入れ替えたり、視点を変えて読んだり、と多様な「思考の場」が考えられる。

三 単元「比べながら読もう」から

本単元は、比較を通して、文と文、段落と段落のつながりを見つけ、内容を確かに読むこと、さらに、そのつながりを活かして文章を書くことをねらう。教材は、「いろいろなふね」（東京書籍一年下）「はたらくじどう車」（教育出版一年下）で、総時間数十時間の単元である。

第一次 「いろいろなふね」を読もう！

① 「きゃくせん」と「フェリーボート」の文章を並べ替える。

② 「ぎよせん」と「しょうぼうてい」の文章を並べ替える。

③ 四つの船を比べながら読む。（授業Ⅰ）

第二次 「はたらくじどう車」を読もう！

① 四つの自動車の写真を読む。

② 「バス」と「きゃくせん」の文章を比較する。

③ 「コンクリートミキサー車」と「ロードローラー」の文章を書く。（授業Ⅱ）

④ 「ポンプ車」の文章を書く。

第三次 好きな乗り物の説明文を書こう！

① 「きゆうきゆうしゃ」を題材に説明文を書く。

② ③ 好きな乗り物を選んで説明文を書く。

(1) 「いろいろなふね」の「思考の場」づくりと授業

説明文「いろいろなふね」は、一読すれば、すつと内容が入りわかったつもりになる。では、そのつながりを崩してみよう。文章をバラバラにして、「きやくせん」の②～④段落を並べ替える。「フェリーボート」の⑤～⑦段落を並べ替える。「ぎよせん」「しょうぼうてい」を取り混ぜて、⑧～⑬を並べ替える。つなぎ合わせる作業はかなりの思考を要する。さらには、四つの船を比較し、「つくり」を入れ替えてみると、それぞれの船の特長が崩れ、「やくめ」「つくり」「はたらき」のつながりをより深く考えることができる。

授業Ⅰでは、まず、黒板に船の写真をはり、その下に「やくめ」の文章をばらばらにはる。すると、子どもたちは、「違う、違う！」の大合唱。写真と文章をあわせ、名前を確認する。次に、「やくめ」と同様に、「つくり」をあわせ、きやくせんとフェリーボートの「つくり」を入れ替えてみる。すると、また「ダメ、ダメ」の大合唱。そこで、「フェリーボートにもきやくしつやしよくどうががありますよ」と問う。子どもたちは、「やくめ」とのつながりをとらえて、「フェリーボートは人と車をはこぶから、車を入れるところの文章じゃないとだめだ」と反論する。漁船の文章

を「さかなのむれをみつけるきかいやさかなを入れておけばしよがあります」と書き換えると、やはり、「やくめ」である「さかなをとる」とのつながりで反論する。最後に、「はたらき」を示し、船の仲間分けをさせる。いろいろな角度から船と船とのつながり、違いを見つけおもしろい。

C 客船とフェリーボートは、客室があったて、漁船と消防艇は働く船だよ。

C 消防艇は、客船とフェリーボートと漁船が火事になったら火を消しに行くね。

C 漁船で取った魚を、客船やフェリーボートの食堂で食べるんだよ。

(2) 「はたらくじどう車」の「思考の場」づくりと授業

「いろいろなふね」で学んだ説明の観点を活かして、説明文を書くことを中心に学習を展開する。まずは、四つの自動車の写真から特長を見つけ、次に、「バス」の文章と「きやくせん」の文章を比較し、文型や接続語の効果を確認する。そこで、「コンクリートミキサー車」は、「つくり」の部分と、「ロードローラー」は、「はたらき」の部分と、「ポンプ車」は、「つくり」「はたらき」の部分とを空白にしておき、少しずつ難易度を上げ、適応範囲が広がっていくような「思考の場」をつくる。

授業Ⅱでは、「コンクリートミキサー車」

の「つくり」「ロードローラー」の「はたらき」を文章化する。「コンクリートミキサー車」では、「大きなミキサー」「たくさんノタイヤ」「広い窓」の三つを選択肢として設け、「しごと」と「つくり」の関係をはっきりさせて記述させる。文末を「あります」「ついでに」「のせています」のどれにするかも選択させたい。「ロードローラー」では、その「はたらき」を動作化させ、口頭作文をつくり、文に表す。ここでは、「くたりくたり」を取り上げ表現の方法として意識させる。

四 おわりに

「思考の場」づくりによって、子どもたちの学習意欲の高まりは顕著である。これまでのなぞりと確認の授業とは違い、子どもたちが思考する姿は格段に増え、相互のかかわりも深い。

「活用型」が意図するのは、学習の転移の問題である。読解から表現への学習展開の中で、思考の方法や着眼点を明らかにしたい。

かつき まさと 〈対話〉をキーワードにした国語科授業の実践研究に取り組んでいる。国語教育探究の会・中国支部のメンバーと切磋琢磨しながら研究を進めている。